

英語カリキュラムの作成と実践 : 習熟度別クラス 編成の実施と経過報告

著者	西部 真由美
雑誌名	東邦学誌
巻	35
号	2
ページ	107-114
発行年	2006-12-15
URL	http://id.nii.ac.jp/1532/00000119/

英語カリキュラムの作成と実践 — 習熟度別クラス編成の実施と経過報告

西部 真由美

目 次

- 1 はじめに
- 2 東邦学園大学における英語カリキュラム
- 3 習熟度別クラス編成方法の変遷
- 4 2006年度プレースメントテストの実施
- 5 成果と残された課題
- 6 おわりに

法について、専任教員である筆者を中心に教務委員会や教学部担当者によって様々な改善がなされてきた。本稿では、開学初年度から2006年度までの6年間における英語科目の実施状況とクラス編成方法の変遷、特に2006年度の新入生を対象としたプレースメントテストの実施状況およびその結果を報告する。

1 はじめに

東邦学園大学経営学部では外国語科目は必修選択科目で、英語・中国語・韓国語のうちいずれか1つで2科目（4単位）の単位取得が卒業要件となっている。本学開学以来6年間、85%前後の学生が英語を選択する傾向が続いている。学生の多様化や基礎学力の低下が進む中で、より良い英語教育を目指して、本学の英語のカリキュラムとその運営およびクラス編成方

2 東邦学園大学における英語カリキュラム

本学では、総合的な英語科目として3種類（基礎英語および中級英語Ⅰ・総合英語および中級英語Ⅱ・上級英語ⅠおよびⅡ）、ネイティブの先生による科目として3種類（英会話・ビジネスイングリッシュⅠ・ビジネスイングリッシュⅡ）を開講している。原則として表1の通りの英語科目が設定されている。¹⁾

表1 東邦学園大学経営学部の英語科目

対象学年	前 期 開 講	後 期 開 講
1年生のみ	・★基礎英語(4)および★★中級英語Ⅰ(1)	
1・2・3年		・★総合英語(4)および★★中級英語Ⅱ(1)
全 学 年	・★英会話(1)	・★英会話(1)
2年生以上	・★★★上級英語Ⅰ[旧:総合英語Ⅱ](1) ・★★ビジネスイングリッシュⅠ(1)	・★★★上級英語Ⅱ[旧:総合英語Ⅱ](1) ・★★ビジネスイングリッシュⅡ[旧:ビジネス英会話](1)

注:()は標準的クラス数を示す。★印は授業内容の難易度を表す。多いほどレベルが高い。

各科目の概要は次の通りである。「基礎英語」は、これまでの英語学習の再確認を行うと同時に大学での英語授業のスタイルに慣れてもらうことが目的である。特に英語の学力が高いと思われる学生を1クラスに集めており、そのクラスを2005年度からは「中級英語Ⅰ」という名称で区別している。

「総合英語」では実践的な英語を身につけることを目的としており、特定の場面（海外旅行・海外留学・インターネットなど）を想定した教材を使用して授業を行っている。この科目でも2005年度より最上位クラスを「中級英語Ⅱ」という名称で区別している。ほとんどの学生が「基礎英語および中級英語Ⅰ」と「総合英語および中級英語Ⅱ」を1年次に履修するが、およそ15%に当たる学生はこれらの科目のどちらかと「英会話」を履修している。1年生のほぼ全員が英語科目の卒業要件の4単位を1年次で取得する計画を立てており、「基礎英語および中級英語Ⅰ」や「総合英語および中級英語Ⅱ」は英語選択者には実質的には必修科目となっている。

上記以外の2年生以上を対象とした英語科目では、1年生対象の英語クラスより授業内容の難易度が高く設定してある。従って、英語に対する学習意欲の高い学生や、1年次に特に優秀な成績を修めた学生が「上級英語」や「ビジネスイングリッシュ」を選択している。これらの科目では1クラスは10人前後であり、少人数教育が実施されている。

なお、開学以来、英語科目全体で、1年間で16クラスで実施されてきたが、専任が5クラス、兼任（短大専任）が2クラス、非常勤教員が9クラスを担当している。

3 習熟度別クラス編成方法の変遷

本学の英語科目では教育効果の向上をめざし、学生の英語基礎学力の低下および学力格差に対応するために、習熟度別²⁾を基本にしたクラス編成を行ってきた。その最終的な手段として、2006年度では新入学生を対象とした一斉プレースメントテストの実施に至った。クラス編成のために行われた手段を年度毎にまとめたものが表2である。

表2 習熟度別クラス編成方法の変遷

	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度
希望調査	入学後○	入学後○	入学後○	入学後○	入学後○	入学後○
自己採点式テスト		入学後○	入学後○	入学後○	入学後○	入学後○
クラス選択にかかわる自己診断			入学後○	入学後○	入学後○	入学後○
教員の指示による後期クラス移動	○	○	○	○	○	○
プレースメントテスト						入学後○

開学初年度は、入学直後に希望する外国語科目を申請してもらい、希望に基づいて人数を調整した上でクラスを編成していた。しかし、前期終了時にはクラス内の能力差が顕著でターゲットとなるレベルを絞りきれないという問題が

明らかになった。英語担当教員で会合を持って検討した結果、教員の指示により上位レベルの学生に後期の履修変更を促し、特定の2クラスに移動させるという措置をとった。

2002年度には、入学後のガイダンス時に外

国語科目希望調査に関わる資料と自己採点式の英語能力チェックテストを新入生に配布し、希望する科目名とチェックテストの得点を申請してもらう方法を採用した。このテストは簡単な文法問題5問と中学校レベルの熟語を確認するテストである。前期で「基礎英語」を、後期では「総合英語Ⅰ」を選択する学生を対象に、得点に従って上位のクラスとそれ以外のクラスに振り分ける方法でクラス編成を行った。しかし、大半の学生が問題の半数以下の正解数を申請して実際の学力差が得点に表れなかった。実際よりも過小な得点を報告する学生も存在し、学生の英語基礎学力を的確に捉えるという点では問題が残った。実質的には、おおよそ上下レベルの2分割になった。依然としてクラス内学力差が顕著であった。

2003年度には、前年度の方法を強化・改善し、外国語科目選択のための資料として、各科目のシラバス、英語の各クラスのレベルを説明する資料、チェックテスト、チェックテストの得点とこれまでの英語学習歴や英語検定などを目安にしたレベル判断のための資料を作成して、入学前に郵送による配布を行った。これらの資料を参考に、新入生は自分の能力に適した英語のクラスを自分で判断して申請することになった。教務側では学生の申請に基づいて人数調整を行い、クラス編成を行った。この方法では特に、最上位の1クラスに英語の能力と学習意欲の高い学生が集中するようになり、最上位クラスは読解中心の教材を使用した英語強化クラスであるという認識が定着した。このレベルの学生は2年次には「総合英語Ⅱ（現カリキュラムの「上級英語」）」を選択するように勧め、1年次の英語の成績優秀者のみをこの科目の受講対象者とした。また、この科目の授業内容を英語検定およびTOEIC対策に特化した。このような体制を整備したことで、能力の高い学生に

はさらに高いレベルの英語学習を継続することが可能となり、「英語の授業が簡単すぎる」と文句を言う学生が激減し、英語の能力を伸ばす環境を整備できた点は高く評価できる。

2004年度と2005年度は、2003年度とほぼ同じ方法でクラス編成を行った。新入生の基礎学力の低下が予測されたので、チェックテストのレベル別基準点を全体的に下げる措置をとった。

また、同じ科目名でありながら1クラスだけが難易度の高い教材で学習していることで成績評価に不公平が生じており、難易度の高い授業で努力をした成果が成績に反映されないという問題があった。そこで、授業内容とレベルに応じた科目名に変更する措置を取り、「基礎英語」の最上位クラスを「中級英語」に、「総合英語Ⅰ」の最上位クラスを「中級英語Ⅱ」に、「総合英語Ⅱ」を「上級英語」に改名し、学生の理解を得られるようにした。

これまでの改善により、最上位クラスの学生に対する学習環境は整えられてと言って良い。しかし一方で、これ以外のクラスに依然として残る大きな学力差、特に最下位レベルの学生に対する指導が効果をあげられないという問題と、自己申請の時点で見当違いがあり、実力に程遠い最上位クラスに申請した2～3名程の学生の扱い方といった問題が残された課題となった。

4 2006年度プレースメントテストの実施

過去5年間のクラス編成方法をさらに一新し、2006年度は一斉英語プレースメントテストの実施に踏み切った。対象は1年生で、第1希望または第2希望で英語を選択した学生である。このテストの実施に向けて半年前より問題作成・テストの実施方法等について作業を行った。プレースメントテストは新入生合宿1日目（4月3日）の夕方のスケジュールに組み入れ、

対象学生はホテル内の4会場に分かれて受験した。試験時間は25分で実施した。学生は比較的静かに緊張した面持ちで試験に取り組んでい

た。試験監督及び採点の作業は、合宿に参加している教員の方々に分担して頂いた。受験した学生の内訳は表3の通りである。

表3 英語テスト受験者数

①	②	③	④	⑤
1年生 総数	対象者総数 (英語希望者)	対象者受験者数 (英語希望者)	非対象者受験者数 (中・韓国語のみの希望者)	受験者合計
228人	215人	189人	4人	193人
	②/①=94.3%	③/②=87.9%		⑤/①=84.6%

注：英語テスト対象者とは外国語科目の第1希望あるいは第2希望に英語の科目を記載した学生。外国語科目希望調査書未提出の学生も含む。

表3に示した通り、試験対象者の87.9%がブレースメントテストを受験し、クラス編成を有効に行うための人数は確保できたが、受験をしなかった（つまりは合宿に参加しなかった）学生も26人おり、以降に書き示す通り、受験しなかった学生の扱いが問題として残った。

礎的な問題と、やや難易度の高い問題をセクションごとにまとめて、最も基礎的な事項も理解していない学生と、英語の学力が際立って高い学生を抽出できるようにした。記号で答える問題は1問1点で換算して35点満点、英作文は別途英語専任教員（筆者）1名によりA,B,C,Dの4段階で採点した。

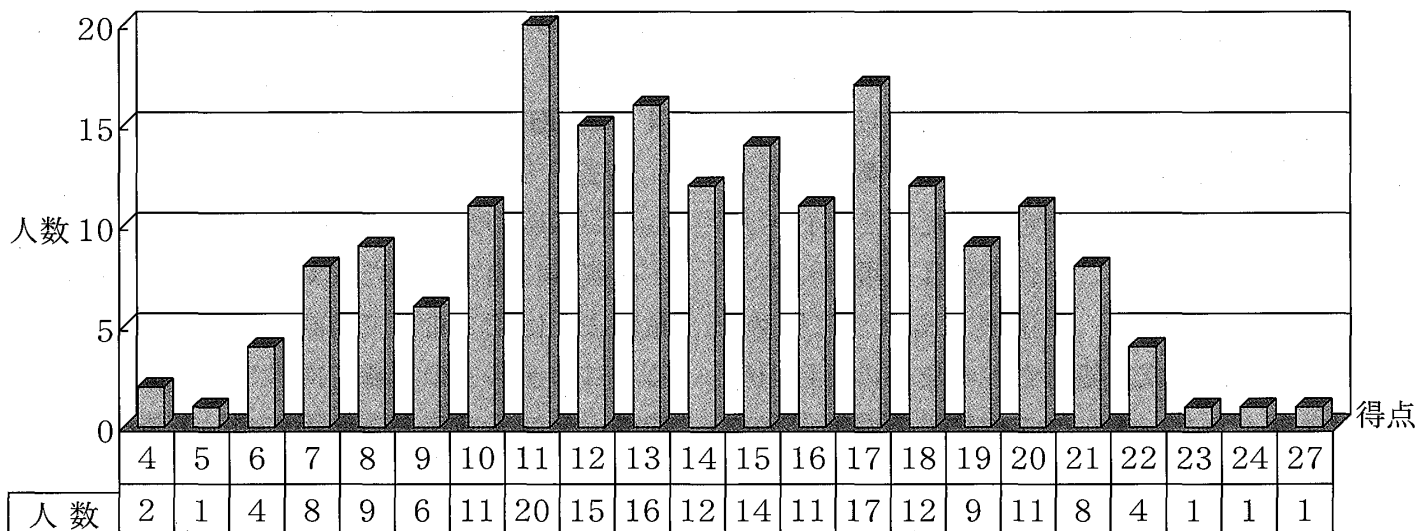
テストの問題内容

テストは、選択肢から記号で答える問題が25問、単語・熟語を英語で書かせる問題が各5問、英作文が1問で構成されている。問題は、基礎的な語彙や文法問題が大半を占めるが、特に基

テスト結果

英作文を除く35問の得点平均点は14.1点で、得点の分布は図1の通りであった。

図1 客観問題の得点分布 (35点満点)



グラフが示している通り、特に優秀な学生が存在する反面、基礎的事項も理解していない学生も多く、学生の学力に大きな差があることがわかる。

また、テストには、基礎的な英語の知識を確

認する目的で、英単語を書かせる問題を出題した。出題したのは、「土曜日」、「3番目」、「8」、「経済」、「人々」である。その正答率を図2と図3に示した。

図2 英単語正解者数

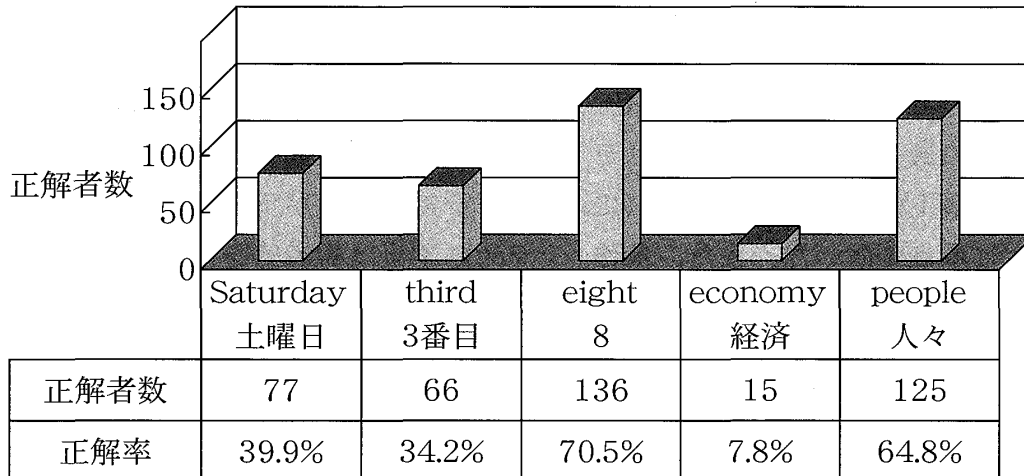


図3 英単語正解状況

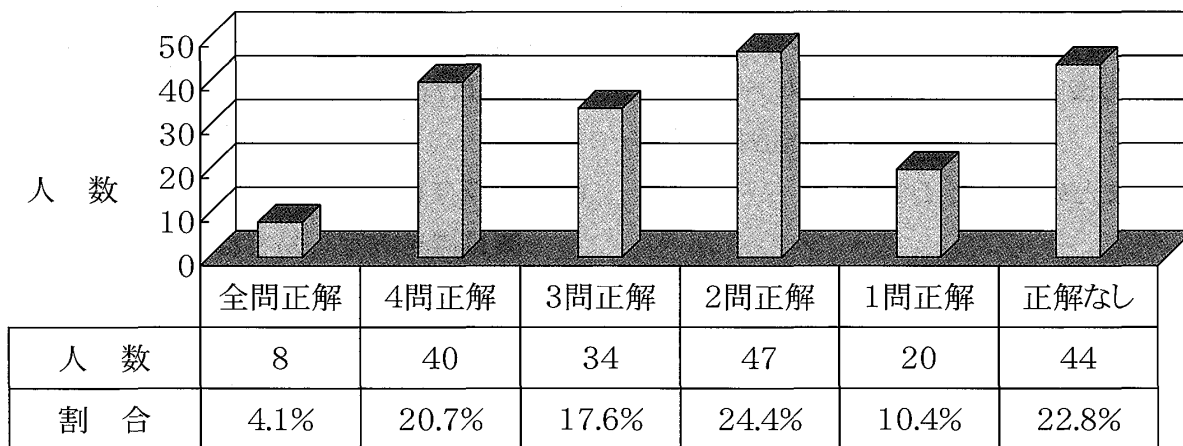


図2が示す通り、数字の8を正しく英語で綴れる学生が最多で受験者の70.5%、次いで「人々」の64.8%となっているが、「経済」に至っては7.8%しか正しく綴れないというのが実状である。また、図3は、これらの初歩的な5つの単語を正しく綴れる学生が4.1%でしかなく、全く綴れない学生が22.8%にも及ぶという深刻な事態を表わしている。マーク式テストやワープロ書きの浸透により、正しい綴りの教育上の重要性は低下する傾向にあるものの、やはりこの

ような基礎的な単語は全て正しく書ける能力が前提でなければ、大学での英語学習が極めて困難になってくるのは明らかであると思われる。

また、英作文に関しては、与えられた日本文を忠実に英語で表現できた評価がAの学生が3名、Bの学生が1名、Cの学生が3名で、残りの学生は記入なしか、自分の知っている単語を2～3語記入したという状況だった。しかし、英作文は突出して優秀な学生を抽出するのに大変効果的であった。

クラス編成作業

プレースメントテストの得点をエクセルの名簿上に入力し、得点の高い学生から順にソートした。同じデータ上に入学前の希望クラスが入力してあり、「英会話」を希望する学生は優先的に「英会話」のクラスに振り分け、最上位クラスの希望を出していた学生もなるべく希望通りになるように配慮した。原則的には英語選択者の最上位の学生を「中級英語」に所属させ、以降は順に基礎英語の最下位クラスまで4クラスに区分した。特に最上位と最下位のクラスに属する学生の選定に重点を置いた。また、英作文の解答から特に能力が高いことが推測される学生は最上位クラスとした。プレースメントテストを受験しなかった学生は、本人の入学前希望調査を参考にしながらクラスの定員の空き状況に従って振り分けた。

5 成果と残された課題

この6年間の改善と一斉プレースメントテストの実施を経て、これまでに得られた成果と残された課題をまとめることにする。

主な成果

(A) 英語の学力が高く、学習意欲のある学生に対する教育効果が向上した。

年度を追うごとに、最上位クラスの学生に対する効果的な英語教育の体制は整備することができたと思う。他の基礎クラスとは異なる難易度の高い読解教材の利用、海外留学の奨励、TOEIC対策などを中心に授業を構成することで、学生の能力向上を図ることが可能になった。特に優秀な学生に関しては、1年次から支援して2年次以降も英語科目の選択を薦めており、海外留学を目指す学生にも準備のために必要な対策が授業で行えるようになってきている。これらの対策により、学習意欲の高い学生の学習意欲

を維持できるようになったことは大きな成果である。

(B) 英語の基礎学力の低い学生に特化した初歩レベルの授業が実施できるようになった。

中学校レベルの英語を最初から大学でやり直すと言うのは、学生の間でも教員の間でも抵抗があったのだが、プレースメントテストによりその対象者を限定して特別クラスを設けることで、特に能力の低い学生に対して最も適した基礎クラスの実施が可能になった。また、このクラスの学生は劣等感を持つのではないかとの懸念があったが、むしろ自分のレベルに合った学習ができることを歓迎する学生が多かった。日本の教育現場では「平等」であることが重んじられ、能力別に分けるという発想自体を忌み嫌う風潮があるのだが(荻谷：2001年) [1]、学生側はそれほど否定的な感情は持っていないようであり、習熟度別クラスの効果の方を優先しても問題はないのではないかと感じた。

(C) クラス内の英語の学力差が縮小され、授業目標を設定し易くなった。

自己診断テストによるクラス編成では、最上位以外のクラスに於いて、突出して能力が高い、あるいは低い学生が混在し、担当教員は学習内容のレベル設定が困難であったが、プレースメントテストによるクラス編成により、クラス内学力差が大幅に解消され、非常勤講師の方々からその結果を歓迎する声も聞くことができた。

(D) プレースメントテストの得点・所属英語クラスと前期の英語の成績から、英語選択者全員の英語の学力と学内での相対的席次が特定できるようになった。

これにより、再度学生の能力に合ったクラスを検討し、後期クラス変更を的確に行うことが

可能になった。また、TOEIC受験を勧めるべき学生や海外留学を奨励すべき学生などを即座に把握することも可能になった。

(E) 学部全体で利用可能な基礎学力の一部を示すデータとなった。

プレースメントテストの目的は英語の習熟度別クラス編成であるが、多くの大学が既に実施しているように、この得点データは1年生の基礎学力データとして利用することが可能である。³⁾ コース別、入試方法別などにグループ化して得点分布を知ることも可能である。同一のプレースメントテストを来年以降も継続すれば、年度別に入学者の英語学力の推移を追跡することも可能となる。

残された課題

(a) 英語能力と学習意欲の間にズレが見られた。

プレースメントテストの結果、特に最上位クラスに属する数名の学生が、テキストを買ってこない・私語が多い・欠席が続くなど、初めから全く学習意欲がないケースがあった。最上位クラスは予習・復習が欠かせない学習内容になっており、2005年度までは勤勉な学生がほとんどであった。2006年度は、学習意欲がない学生が最上位クラスの雰囲気乱す傾向にあり、これがプレースメントテスト導入後の最大の問題として浮き彫りにされた。プレースメントテストの結果だけでなく、本人の意志も尊重しながらクラス編成を行う必要があると感じた。

(b) なるべく苦勞をせずに単位を取得したいと考える学生が多い。

英語を学習する理由が卒業要件であるからという以外になく、できるだけ楽をして単位を取るために、自分の能力を過小評価して申請し、

おそらくはプレースメントテストも適当に解答をする学生がいることも問題である。

(c) 成績評価の不平等が解消されるに至っていない。

習熟度別クラス編成による英語の授業では、複数教員が異なるレベルの教材を使用して異なる成績評価を行うため、その成績が同じ科目を受講している複数クラス全員のなかで見た場合に公平なのかという点が常に課題として残っている。

(d) プレースメントテスト未受験者の扱いが定まっていない。

プレースメントテストを入学後の合宿中に行ったため、合宿欠席者はプレースメントテストを受けなかった。この数が26名(15%)で、そのうち2割ほどの学生の学力が極めて高く、自分の能力よりもレベルの低いクラスに所属している事がわかった。プレースメントテストの受験率を上げることも今後の課題である。

(e) プレースメントテストの作業の分担と軽減が必要である。

本学ではプレースメントテストの作成、実施要項の作成、成績入力、クラス編成などを全て英語の専任教員1名で行っている。この作業は膨大であり、しかもテスト終了後は、履修登録までの2～3日間に採点とクラス編成に至る全ての作業を終えなければならない。本学では、テストの実施や採点に至っては他の教科の先生方に分担を依頼せざるを得ない状況になっている。資料[2]によれば、日本の52%の大学が統一テストに市販テストを使用しており、自主開発テストを使用している大学は36%ほどである。市販テストの受験料は、40%ほどの大学では学部・学科予算で負担している。また、テス

ト実施担当者については、英語教員のみで行っている大学が42.5%で、英語教員と事務職員・ティーチングアシスタントで行う大学が43.3%となっており、他教科の教員の援助を求める大学は極めて少ない。このような他大学の状況を参考にして、本学でも1学年全体を対象にしてプレースメントテストを実施するには、予算と労力の面で改善していく必要がある。

6 おわりに

今回の報告から明確な通り、1年生を対象とした英語科目の習熟度別クラス編成は学生間の学力差の大きい大学、学部では高い教育効果が期待できる方法であり、その編成を確実にするためには今後もプレースメントテストの継続は必須と考えられる。前節で指摘した課題を克服するために一層の改善が必要である。また、このような報告により、より多くの教員や職員の方々が本学の英語科目の運営について理解を深めて下さり、また英語非常勤の先生方の協力強化や情報交換の促進につながれば良いのではないかと願っている。

〈注〉

*英語科目の運営にあたり、教学部の貫名・藤井両氏には特にご尽力を頂いている。またプレースメントテストで試験監督・採点をお手伝い頂いた本学専任教員の先生方に対しても、心より感謝を申し上げたい。

- 1) 本学開学年度から4年間は「中級英語Ⅰ」・「中級英語Ⅱ」は設けていなかった。また、現在の「総合英語」は「総合英語Ⅰ」、「上級英語」は「総合英語Ⅱ」という名称だった。
- 2) 「習熟度別」とは、本稿では日本の教育現場での慣習に従って、「能力・学力別」と同じ意味合いで使用している。
- 3) 日本の大学の半数を対象に行った杉森（2003年）[2]の報告によれば、4年生大学の60%が1年生に英語の統一テストを実施しており、その目的は習熟度別クラス編成を行うため（55.7%）と、到達度測定のため（25.7%）となっている。

引用文献

- [1] 荻谷剛彦 『階層化日本と教育危機---不平等再生産から意欲格差社会へ』 有信堂、2001年7月。
- [2] 杉森幹彦 「英語統一テスト・習熟度別クラス編成・到達目標の設定および測定に関する実態調査の報告」『政策科学』第10巻3号、立命館大学政策科学会、2003年3月、pp.3・25。